

## 短歌の広げる網から 駒田晶子

「心の花」時評を担当させて頂くことになり、ネット上の短歌世界をひらいてみた。今まで「心の花」関連のページくらいしか覗いたことがなかったので、驚愕した。短歌という分野の網の大きさ、情報の多さに、tankaful(<http://tankaful.net>)というウェブサイトをパソコンに出せば、最新の月刊総合誌の掲載内容、話題の最新歌集、催し物はもちろん、興味のある結社や出版社のリンクされているサイトに一瞬に飛んで行ける。これだけの情報を更新しつづけているサイト運営者の労苦を思った。

短歌って、何なのだろう、とあらためて思う。二十歳で短歌と出合っつてすぐの頃は、わたしの心のもやもやを形として作りだしてくるような、ふしぎな器であった。短歌形式の器に盛り、見栄え良く整え、読者の口に入り咀嚼されたとき、どんな音を立てるのか。どう消化されてゆくのか。この一点にのみ興味があった。tankafulのリンク集には、各大学短歌会のサイト紹介もある。計十八校。北海道大学短歌会「北大短歌 創刊号」電子版は、無料で読むことができた。わたしが短歌と出合った時期（青年期？）の年齢層の学生たちに、短歌を共有する場がひらかれているなんて刺激的だなあ、と感心する。

そして『短歌』（KADOKAWA）五月号より「大学短歌会が行く！」

という新連載が始まった。「学生短歌バトル2015学生短歌会対抗 超歌合」が開催されたのが、二〇一五年三月一日。この催しは「ニコニコ生放送」で視聴することができた。当日の視聴者数は、二千人以上。サントリーホールで考えれば、客席が満席立ち見までいたかもしれない、という数だ。このイベントは『短歌』編集部が構想し、大学短歌会と打ち合わせを重ねながら、開催まで十月ほど要した、と岩内敏行氏のレポートに書かれている。残念ながらわたしは知らなかったで視聴できなかったけれど、アンテナさえ張っていれば、ライブ感を味わえたのだ。自分が暮らす場所に歌の場がひらかれていない場合でも、このシステムなら交通費をかけて出かけてゆかずに、参加可能だ。KADOKAWAが先導し、「短歌の場」のあたらしい可能性を示したイベントだったと思う。

・習慣として舌打ちを続けたる農夫あゆめりイオンモールを

内藤 瑛紀（『短歌』五月号）

・雪の上に雪がまた降る 東北といふ一枚のおほきな葉書

工藤 玲音（『短歌』六月号）

一首目の作者は、北海道大学短歌会所属。旭川にできたイオンと農夫の結びつきが印象的だ。二首目の作者は東北大短歌会所属。東北の捉え方が大きなスケールで、うつくしい。短歌を継続してゆくには、個人的資質も関係するが、場と仲間が必要だ。わたしは短歌をつづけて二十年経つが、結社の存在が大きかったと断言できる。せつかく青春期に短歌と出合ったのだから、現在の便利なツールを使いながら継続する人たちが増えてくれれば、いい。持続することで見えてくる、短歌が内包する時間の長さ、膨大な作品数の底なし沼に足を踏み入れてくれれば、と願う。